

(2) 実態からの課題作りとめざす子ども像について

○ 食育指導は「生きていくための不可欠な学習活動」ととらえ、食生活の実態から子どもたちの課題とらえをおこなった。そのことで子ども理解をおこなう視点が増えた。課題が明確になることで解決を探るための手段の授業化などの筋道が立てやすくなる。また、学習したことが保護者へも広がっていき、その食生活の見直しのきっかけとなっている。PTA活動とも連動させやすく、家庭においてもさらに、子どもたちの生活背景が個別に把握されたことで、生活指導・学習指導にも反映された。

○ 学習後の家庭での実践化、習慣化を図るために、チャレンジウィークなどの取組期間を設定し、食生活の改善を図ってきた。このことで保護者の食生活に関する意識がより前向きになってきていると感じられる。家庭での子どもたちの意識が高まってきたことで、保護者にも変化が見られ始めた。PTA研修部提案のリレーノート（子ども理解を図る保護者間の交流ノート）では、栄養的なことや発育に応じた食の在り方、苦手な食べ物を克服するレシピなど親の中でのアイデアや取組紹介がされ始めた。我が子の食生活を発達や健康面、さらには食文化へと広がりを見せ始めている点が大きな成果としてあげられる。

○ 夏期休業中に1学期学習した内容を再度取り組んだ学年もあり、家庭での実践化が進みつつある。
・食べ物の調理方法を変化させて挑戦する。5年生おやつを取り方。6年生夕食作り。などの取組が上げられる。

(3) 年間指導計画の具現化（野上プラン）

全学年で取り組めたことで、系統的な指導のモデルが完成した。「食生活を意識し始めていく1年生」から、「自分でよりよい食生活を創ろうとする6年生」までの道筋の外観はできつつある。

学 年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
内 容	どうして食べなければいけないの	2っこり元気な体になろう大作戦	食べ物を食べて元気な体を作ろう	すき、きれいでなく食べよう	体に必要なエネルギーについて考えよう	自分にとってよりよい食事を考えよう
	○朝食と給食について、調べたことをまとめる。	○食べ物と給食の関係を調べ、かんがえをまとめる。	○バランスを考えた食事と給食について調べる。	○健康な食事について考えさせ実際に生かしていく。	○必要摂取カロリーと生活習慣病について考える。	○望ましい朝食を知り、実際に自分で作ってみる。

(4) 言語力の活用として

①子どもたちの様子からみて

- ・「腹八分が必要だ」「おやつは八つ刻からが始まりの言葉である」自分で判断して食べていかなければいけない、という感想（5年生）
（思考力・表現力の拡充）
- ・「こんなふうにすれば食べられると思う。」苦手な食材に対して、調理方法や味付けを工夫することで食べていけるということを考えた（4年生）
（思考力の深化）
- ・話し合いや意見の出し合いで、自分の考えをわかりやすく伝えるための言葉や話し方を意識しはじめた児童が増えつつある。
（思考力・表現力・判断力の深化と拡充）

徐々にではあるが、授業で培ってきた言語力を用いながら、食育の学習に望む姿が見られるようになってきた。特に日々の短作文指導が、書いてまとめたり発表したりすることに有効にはたらいている。

(5) 仮説から